

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：32612

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12540

研究課題名（和文）ローマ期アルプス峠への新視角 帝政前期における「閉じた峠」と地域社会

研究課題名（英文）New angle on the Alpine passes in Roman times: influence of "closed passes" upon local societies under the Principate

研究代表者

長谷川 敬（Hasegawa, Takashi）

慶應義塾大学・文学部（三田）・准教授

研究者番号：90781055

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、接続と断絶という対照的な二側面を併せ持つ峠の存在が近隣共同体に与える影響を、帝政ローマ前期のアルプス山脈西部の峠を事例として考察した。その結果、大サン・ベルナル峠、小サン・ベルナル峠、モンジュネーヴル峠それぞれの山麓共同体の間に興味深い相違点を検出するに至った。すなわち、他地点とは異なり、小サン・ベルナル峠のフランス側麓に位置する共同体では、史料的に高位公職者の存在が確認されない点である。その背景として、峠やその周辺の厳しい自然環境に加え、有力な近隣都市ウィエンナの住民や名望家との競合によって、当該共同体では、地方名望家層が経済的に脆弱であった可能性が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今回の研究の成果は、峠のメリットのみを重視する従来の研究に対し一石を投じるのみならず、領内に多くの山岳地帯を内包していたローマ帝国の社会や統治のあり方に関する新たな研究の地平を開くものともいえる。さらに、様々な交通インフラや通信手段の発達の結果、わが国では日常生活における地理的・地形的要素への意識が希薄となりがちであるが、本研究の成果は、時として発生する自然災害への対応や、とりわけ交通インフラが脆弱な山間部で進む過疎化の問題に対処するにあたり、歴史的な参照軸を提供するものといえる。

研究成果の概要（英文）：In this study, we examined the impact on neighboring communities of the existence of mountain passes, which have two contrasting aspects: connection and disconnection. We focused on mountain passes in the western Alps in the early Roman Empire as examples. As a result, we detected an interesting difference between the communities at the foot of the Great St. Bernard Pass, the Little St. Bernard Pass, and the Montgenevre Pass. Namely, unlike the other locations, in the community located at the French side foot of the Little St. Bernard Pass, there is no historical record of the existence of high-ranking officials. The background to this is that the local influential class in the community in question may have been economically weak, due not only to the harsh natural environment of the pass and its surrounding area but also to competition with the residents and influential people of the powerful neighboring city of Vienna (modern Vienne in France).

研究分野：古代ローマ史

キーワード：古代ローマ 峠

1. 研究開始当初の背景

広大なローマ帝国の版図に張り巡らされた交通ネットワークを考察する際に、つとに前提とされる要素が、「地中海」と「ローマ街道」である。前者はそこに注ぐ河川も含めて広範な水路網を構成し、一方後者も首都ローマから辺境地帯に至るまで網の目のごとく帝国全土を覆った。そして両者は海港・河川港を通じて互いに結節し、相互補完的にヒト・モノ・情報の流れを導いたのである。研究代表者はこれまで、主に水路網に着目し、とりわけ外洋・内陸水上交通が盛んであったガリア・ゲルマニア諸属州で、人々が水上交易を軸にどのような人的紐帯を結んでいたのかを解明すべく研究を進めてきた。本研究は、こうしたローマ帝国の交通ネットワークを巡る研究代表者の長期研究計画の一環として計画されたものであり、現在研究代表者が遂行中の南仏ドミティア街道に関する研究とともに新たに陸路網に重点を置いた中期研究計画の一部を成している。その上で本研究は、地中海沿岸平野部を走るドミティア街道とは地理的に対照を成すアルプス山脈西部の峠に焦点を当てた。

このアルプス山脈を含む地中海世界の山岳地帯について、かのフェルナン・ブローデルは、街道の役割を強調した上で、「街道は「平野の延長のようなもの」であり、高地の国々を横断する、平野の力的一种である。」(浜名優美(訳)『地中海 普及版 I 環境の役割』藤原書店、2004年、59頁)と述べている。また、多くの古代史研究者も、基本的にイタリアとアルプス以西・以北を結ぶ峠道の「結節点」としての側面を重視してきた。しかし、こうした先行研究には、峠道に代表される高地街道が直面する厳しい自然環境への考慮が欠落していると言わざるを得ない。帝政ローマ期のアルプス山脈では、一部を除き多くの主要峠が冬期間に通行が困難となり、その間「回廊」としての機能は著しく減少したのである。そうした中、自らの商品とともに峠を往来していた商人たちは、通行可能な峠などの迂回路を取ったと考えられる。しかし、その商人たちの積荷運搬を支援したであろう峠の麓の住民たちはどうしたのであるか。所領経営を営む名望家層を除く多くの住民たちにとって、峠道の閉鎖は収入の途絶を意味したはずである。この状況に彼らはどのように対応したのであるか。この疑問が本研究の出発点となる「問い」となった。

2. 研究の目的

本研究はアルプス山脈諸峠の閉鎖性を十分に考慮してこなかったブローデルを始めとする先行研究の主潮流に対し一石を投じるべく、峠が閉じる冬季、交流・物流の要から一転して山間部の盲腸的立地へと激変する状況下で、麓の地域社会がどのような影響を受け、またその変化にどのように対応していたのかという、これまで先行研究において顧慮されることのなかった問題を検討することを目指した。この検討によって、これまでの「峠麓の共同体」=「主要街道の中継地」=「経済的繁栄」という一面的な図式の再考が求められることになり、峠の麓という立地が、いわば「諸刃の剣」になりうるという独創的な結論が提示されることが期待された。そして、近年再評価が進むローマ期の陸上輸送の役割を巡る経済史の議論において、ローマ世界を南北に隔てるこの「障壁」を平野部と同等に捉え、一様に「回廊」として評価することへの警鐘となることも期待された。さらに、本研究の対象が、政治・軍事・経済等の諸側面において重要地域であったガリア・ゲルマニアとイタリア本土を結ぶアルプス西部の諸峠およびその麓の地域社会であることから、その研究成果がもたらすインパクトは、社会経済史分野にとどまらず、政治史、軍事史等の諸分野にも及ぶことが予想される。とりわけ、帝政前期の両ゲルマニア属州は、駐留軍団向けの物資輸送もさることながら、外敵への対処や、駐留軍団の監督、国境地帯の社会秩序維持といった重要な課題を抱えており、帝国当局としてはこれらへの対応のためにもゲルマニアとイタリア本土との密接な連絡は必要不可欠であった。それだけに、冬季の両地域間の往来途絶がもたらす影響は大きく、したがって本研究の成果は帝国の政治史・軍事史の見直しにもつながる可能性がある。

3. 研究の方法

本研究では、帝政前期(後1世紀中頃~3世紀中頃)、ガリア・ゲルマニア地方をイタリアから隔てるアルプス山脈西部で特に重要であった3峠 大サン・ベルナル峠、小サン・ベルナル峠、モンジュネーヴル峠 のガリア・ゲルマニア側麓に位置する共同体に焦点を絞った。そして、冬季の通行が至難であった前者二峠の麓共同体を主要検討対象とする一方、冬季も通行可能であったモンジュネーヴル峠の麓共同体を比較対象に設定した。その上で、まず研究代表者は、前者2峠の麓に位置する共同体では、所領経営に依拠する地元名望家層を除く多くの住民(とりわけ男性)が、何らかの形で峠越えの交通補助(宿舎、駄獣の提供等)に従事したと考えられる状況下で、彼らが峠通行の遮断される冬季に季節労働者として平地方面の近隣共同体に流入していたのではないかと、という仮説を立て、その仮説を立証すべく、近隣共同体における峠麓の共同体出身者の存在、ならびに峠麓共同体における住民墓碑の男女間における数量差(上記仮説が有効であれば男性墓碑が相対的に少なくなると想定)を、碑文史料から読み解くことを試みた。

しかし、「4. 研究成果」で詳述するように、結果的に名望家層以外の住民の近隣共同体への

移動、ならびに彼らの墓碑における男女間の有意な数量差を検出することができなかったため、当初の研究目的を達成するための新たな研究手法として、当初分析対象より除外していた地元名望家および属州総督に関する碑文史料にも分析を加えることとした。その理由は、名望家や属州総督に係る碑文史料数が比較的多いこと、そして先行研究の把握を進める中で、アルプス山岳地帯の名望家が、所領経営のみならず街道通行者に対するサービス提供も行い、それによって経済力を養っていた可能性があることに気付かされたためである。つまり、名望家層が、峠の閉鎖性によって経済的影響を被る可能性が判明したことから、当初の研究目的に照らして適切な分析対象と判断した次第である。

4. 研究成果

上記の手法により研究に着手することとなったが、3 峠の麓共同体からその近隣共同体への労働力の移動については、碑文史料からその痕跡をたどることは困難であった。エムとその近隣共同体ヴィエンヌ(ローマ植民市)では、ともに Vireius という同じ氏族名を持つ一族の存在が確認できたが、ヴィエンヌの Vireius 一族は、亡くなった幼子とその両親、そして夫の墓碑を建てる妻であるため、冬期の仕事を求めてエムから一時的に移住した同じ一族の構成員とは考え難い。

また、労働力の季節移動の存在を強く示唆すると考えられる性別での墓碑数の偏りについては、3 峠の各麓共同体の主邑であるマルティニー(大サン・ベルナル峠)、エム(小サン・ベルナル峠)、プリアンソン(モンジュネーヴル峠)において確認されている墓碑は、いずれもその全てまたは大半が男性を被葬者とするものであった。しかし、そもそも各主邑の墓碑事例数は、10 個以下であり、また、その中には、季節労働に従事したとは考えにくい現地駐在兵士やその妻、さらに名望家本人も含まれるため、上記事実より季節労働に従事した可能性のある住民男性の墓碑数が有意に多かったとみることは不可能である。

このように、当初定めた方法による研究の遂行は、大きな困難に直面することとなった。そのため、当初の研究目的を達成すべく代替の研究方法を模索した末、当初は分析対象に含めていなかった峠麓都市の名望家層と、マルティニーとエムをそれぞれ座所とした属州総督に関わる碑文史料を新たに分析することとした。その結果、大サン・ベルナル峠のスイス側麓、ならびに小サン・ベルナル峠、モンジュネーヴル峠それぞれのフランス側麓の3 共同体の間に興味深い相違点を検出するに至った。すなわち、帝政前期における大サン・ベルナル峠のスイス側麓の共同体である Civitas Vallensium(以下 CV と呼称。主邑：マルティニー)の領域では、二人委員等の高位都市公職就任者に関わる碑文が複数(8 例)確認できた。(さらに、先行研究によれば、CV は3 世紀以降には元老院議員も輩出することとなる。)また、モンジュネーヴル峠のフランス側麓の共同体である Municipium Brigantiensium(主邑：プリアンソン)でも、二人委員経験者による墳墓建立を伝える墓碑が確認されており、その近隣共同体である Civitas Ebrodunensium(主邑：アンブラン)においても二人委員就任者の墓碑2 点が知られている。これに対し、小サン・ベルナル峠のフランス側麓の共同体である Forum Claudii Ceutronum(以下 FCC。主邑：エム)では、都市公職者(magistri)の存在を示唆する可能性のある碑文が1 例知られるのみである。これは、エムがマルティニーと同じく属州州都を兼ねること、そして両者が地理的にも近く、気候も類似すること(冬季の峠閉鎖)を考慮すると、とりわけ注目に値する差異であり、FCC の領域、特に主邑であるエムでの全体的な碑文残存状況に照らしても、単なる偶発的な問題とは考えにくい。

他方で、FCC では、Foro Claudii Ceutronum、つまり文字通り取るならば、FCC 共同体成員一同の名前で、皇帝や属州総督を公的に顕彰する碑文が複数(8 例)発見されている。これは、実質的には、FCC の都市参事会が決議を経た上で顕彰を行った結果であると考えられるため、上述の特異点にもかかわらず、FCC には都市参事会の担い手たる地元名望家層が確かに存在していたことを強く示唆する。このことは、実際にエム中心部において、富裕層のものと思われる邸宅跡が発見されていることから裏付けられる。したがって、FCC では他の共同体同様に名望家層が存在し、顕彰実施という形で実際に自治を担っていたにもかかわらず、なぜ個々の都市参事会員、とりわけ高位公職者の存在や活動が見えにくいのかという問題が浮かび上がる。これについては、様々な要因が想定されうるが、そのうちの一つが経済的要因である。すなわち、恩恵施与行為や皇帝・属州総督の顕彰を、個人として積極的に行うだけの経済的余力に欠けていたという可能性である。(実際に、通常は沿道共同体や沿道地主が費用を負担する街道や橋梁の修復を、ルキウス・ウェルス帝が FCC の領域内で実施したことが知られる。CIL, XII, 107)そこで、なぜ FCC の名望家たちの経済力が限定的であったのかを考察することが、次の検討課題となった。

これを受け、先行研究の成果を参照しつつ、多面的な検討を行ったところ、まず CV と FCC の地理環境面での相違が浮かび上がった。つまり、CV はローヌ川上流の河谷、FCC はイゼール川上流の河谷をそれぞれ中心領域としている点で一見共通しているが、しかし、実際には、前者が、より長くそしてより広い谷底の平地を享受するのに対し、後者は狭隘で距離も短い平地しか持たない点である。これは、FCC では耕作地が限られていたことを意味し、ゆえに名望家の所領経営において、農耕よりも牧畜に依存せざるをえなかったことになる。FCC の領域では、名望家層の所領経営の中心であったと考えられるウィツラ(邸宅兼農場)の存在が確認されているが、後1 世紀の大プリニウスによれば、FCC の領域は、首都ローマでも有名となるほどの良質のチーズ

の産地であり（HN 11, 240-241）したがって、実際に FCC の名望家層の重要な経済基盤の一つは牧畜であったことが窺える。

無論、経済基盤が牧畜中心であったこと自体が、経済的弱さに直結するわけではない。しかし、さらなる考察の結果、FCC の西隣の共同体であるヴィエンヌの影響力の強さと小サン・ベルナル峠の閉鎖性がともに作用することで、FCC の名望家層の経済力を奪っていた可能性が浮かび上がった。ローヌ川中流域を中心とするヴィエンヌは、有力な商業都市であり、その領域は FCC の領域を包み込む形で広く東方に広がっていた。そのため、冬季に小サン・ベルナル峠を介した通商が不可となると、FCC の名望家たちに残された交易路は、実質的にヴィエンヌの領域を通過するものだけとなり、よってチーズ等の牧畜製品をローマをはじめとするイタリアの大消費地に輸出するためには、各地に勢力を張るヴィエンヌの名望家や有力商人の介入を甘受せざるを得なかった可能性がある。FCC とヴィエンヌの関係は、両者の境界石が複数発見されていることから、放牧地を巡って緊張した状態にあったとみられ、よって、商品輸出に際し FCC 側の名望家が不利益を被った可能性は少なからずあったであろう。しかし、その一方で、エムで出土した土器の生産地等の情報を考慮すると、FCC 側は土器等の供給においてヴィエンヌ側に依存していたことも窺え、FCC の立場の弱さがさらに際立つ。これに対し、CV の近隣共同体である旧ヘルウェティ族共同体（以下 HV。主邑：アヴァンシュ）も、商業中心地として活況を呈したが、CV にとって HV は、ガリア・ゲルマニア方面に立ちふさがる唯一の近隣共同体ではなく、そのため、情勢に応じてレマン湖等を介し HV 領域を迂回することも可能であった。したがって、FCC の名望家層の経済的脆弱性の一要因として、イタリアへと続く峠道が実質的に通行不可となる冬季に、外部との交易活動の大半を緊張関係にある近隣共同体ヴィエンヌに依存しなければならなかったことが考えられるのである。

このように、当初の研究方法ならびに状況想定とは異なる形ではあるものの、アルプス西部の峠にみられる閉鎖性が、麓の社会に実際に影響を及ぼし得る可能性が明らかとなった。しかし、それはあくまでも一部の峠にのみ当てはまることであり、その他の峠とその麓社会との関係については、依然不明な点が多い。その関係の解明が今後の課題となるが、その解明には、個々の麓地域における土地ならびに天然資源の活用の実態をさらに綿密に把握し、各地域の経済構造を包括的に理解することが鍵となる。今回の研究成果は、ごく一部の峠麓社会の特性を明らかにしたのみではあるが、従来の研究動向に一石を投じ、その軌道を変えるきっかけとなるだけのインパクトは有すると考える。学界に対するそのインパクトを確かなものにし、さらに帝国の政治史・軍事史というより大きな枠組みの議論に貢献していくためにも、上記の課題に引き続き取り組んでいきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 長谷川敬	4. 巻 -
2. 論文標題 ローマ帝政前期の大・小サン・ベルナル峠ー北方と地中海を結ぶ地域社会ー	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 慶應義塾大学文学部極東証券寄附講座「地中海の歴史世界 / 歴史のなかの地中海」（2021・22年度）講義録	6. 最初と最後の頁 83-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------